

# 5 年 生 部 会

## 1 子どもの姿の捉え

クラス・担任替えがあった4月から数週間たった6月、受け持った子ども達の良い点・足りない点（「公共性」に関すること）を、担任各自がシティズンシップ授業設計書に記入したものが以下である。

「公共性」に関する 長所	「公共性」に関する 短所
<ul style="list-style-type: none"> <li>・やることが遅い子、声の小さい子など弱い立場に対して優しい。忘れ物など迷惑をかけた友だちに対し、比較的寛容（A, T）</li> <li>・質問を怖じ気づかずに声に出せる雰囲気がある（A）</li> <li>・みんなで生活をよくしようという雰囲気がある（T）</li> <li>・優れていると判断したら、その人の好悪に比較的關係なく拍手をおくれる（A）</li> <li>・損得を考えずによく働く（T）</li> <li>・好きなことを追求する。イベント好き（Y）</li> <li>・友だちや先生の言葉に素直に耳を傾け、よいと思うことは進んで取り組む（S）</li> <li>・友だち同士、よくないところは注意し合い、お互い聞こうとする素直さがある（S）</li> <li>・誰かが気づくと、それをみんなに呼びかけ協力を求めようとする。周りもそれに協力しようとする（S）</li> <li>・自分の意見を表現しようとする。他者の考え方を聞き入れ、妥当性や正否を判断しようとする（K）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・声が大きく、その場で権力を握っている（と思われる）人の指示に無抵抗・無条件に従ってしまう（A, K）</li> <li>・習った漢字を十分に活用して文章が書けない（A）</li> <li>・子ども集団の中に暗黙の上下関係があり、力で押しえられている子がいる（T）</li> <li>・教師によって態度を変える（T）</li> <li>・教師の前ではよくふるまい、不在の場合は崩れる（T）</li> <li>・ほめられないと行動しない。嫌なことはやらない（Y）</li> <li>・イベント好きで普通の日常が苦手（Y）</li> <li>・チームで折り合いをつけてまとめられない（Y）</li> <li>・自分の考えを発言しようとする子どもが少ない。発言する子としない子の差が大きい（S）</li> <li>・言わなくて済むなら言わないで終わってしまう（S）</li> <li>・ものの見方が一面的で、広い視野からみようとする力が弱い（S）</li> <li>・自信がなかったり、間違ったりすると、何も言えなくなる（K）</li> </ul>

## 2 教師のねがいと手立て

上の表から、学年担任それぞれ、子どもの捉え方が微妙に異なることがわかる。分野（教科）が違うことや指導観・教育観の違いなどからくるものであろう。

私たちは、その違いを埋めて同質化するというよりは、さらに捉え方・見え方を出しあって、子どもへのまなざしを複数化していこうという年間方針を固めた。そこには、担任各自の指導観を広げ深めるとともに、担任団として子ども理解を多様に共有して指導に生かすという2つの願いが込められていた。まず「めざす子どもたち（像）」と具体的な授業の手立てを話しあった。（一部を紹介）

<p>考えの過程や、その考えに至ったアイデアなどを表現できる 意見の違いを曖昧にせず、事実や根拠を知ろう、わかろうとする 問題が発生したとき、「もし自分があの子の立場だったら」と考えられる 友達や先生の話に、発見や疑問の目をもつことができる など</p>	<p>→ 一見間違えと見える解決方法から問題解決に至る経験をさせる。 少人数で話し合う。書いて自信をもたせる。先生に正解を求めない</p>
---	---

そこで学年としては次の2つの方法で進めることにした。

- ① あるひとりの子どもについて、変容を書いて、読みあう
- ② 日常の授業を見あう。「公共性」に関するエピソードを書いて、話しあう。

### 3 実践から子どもの姿をふり返る

#### (1) ひとりの子どもに着目する方法から

教科担任制であるからこそ、日頃の子どもたちの情報を出し合い、子ども理解を進めることが重要だと考えた。以下はM児に着目して私たちが書きためていった記録の一部である。

A 教諭	B 教諭	C 教諭
<p>・昨年度から教えているので、M児の印象は学習に真面目に取り組むが、声を発することはあまりなく、学習感想や自分の考えを書く場面では、自分の考えを書くことが苦手であった。</p> <p>・今年度は、昨年度と違い、自分の考えをノートに書いている。字もすこしずつ丁寧になってきたように思う。学習に対して前向きになってきたことが、書くことにつながっているように感じる。</p> <p>・1学期は市民係として、授業が始まる前に、地図を使ったクイズやゲームを積極的に行った。声を発することがほとんどなかった昨年度までのことを考えると、毎回必ず忘れずに活動には取り組むし、笑顔もよく見られている。</p>	<p>・4月の最初の日直で、M児は誰にも何も聞こえない朝のスピーチをした。ものすごい早口と意味のわからない音。子ども達の反応は「聞こえません」とは言うものの真剣に聞こうとはしていないようだ。そっと近くの子にたずねると「4年生のときもそうだったよ」。</p> <p>・5月。一人で作文をみんなの前で読む。早口すぎるので、教師が背後にまわり、同じ行をゆっくり読むように声を重ねてみた。M児の背中はびっくりするほど熱い震えている。最初私は小さい声で重ねていたのだが、Mはいやがらないようなので、少し声を大きくするとMの声も大きくなった。聞いている子たちは、おやおや？という顔をしている。みんなに聞こえたおかげで、初めて「質問！」の手が挙がり、質問してもらえた。だがM児は下を向いていつものようにそそくさと席にもどった。</p> <p>・6月、創造活動で1児と二人で「畑に行っていていいですか」。後で教師が様子を見に行くと、大きな石を動かしてアリのあわてふためく様子を見て興奮し大きな声をかけあっている。こんなに敏捷なMを初めて見た。</p> <p>・6月末、インド転出する子のお別れ会の司会にMは立候補した。まわりの子が「先生！Mが司会やるって、言ってるよ」と代弁してくれて、「そうなの、やってくれる？」と意思をたずねると、こくりとうなずいた。やる気を見せてくれるようになって、うれしい。</p>	<p>・1学期当初課題に一生懸命に取り組むが、発表の場面になると、ややおどおどした様子で、声も小さく、ほとんど何を言っているのか聞き取れないこともあった。</p> <p>・1学期後半、自学で気象の研究をしていたM児は、自他ともに、天気や雲に詳しいと認められていた。発表ではまるで別人で、内容的にも専門性でも他の班を圧倒した。M児の活躍で、班の発表が絶賛され、M児は今まで以上に自信をつけたようである。</p> <p>・それ以降、休み時間になると、自分から話しかけてくるようになった。「気象クイズ」や「10種実型」「閉塞前線」など、非常に専門的な話題だが、周囲もそれに混ざり、M児を中心にした「何かコミニティ」の形成が見られた。</p>

5年当初のM児は、表現すべき場で自信がなくおどおどしてしまうなど、心配な点がたくさんあった。しかし、M児が「変わってきた……」という話が1学期後半ころに出てくる。

M児の変容の要因の一つ目は、担当している学習分野で見せる姿を教師が語り合い、把握することによって児童理解がより深くなり、指導が的確にできた点が挙げられる。M児について得た情報をそれぞれが違った場面で生かし、M児に自信を持たせたり、やる気を出させたりするために生かすことができるようになった。自分には見えていなかったよさや、知られざる一面を把握することは、わたしたち教師の指導のあり方や子ども達への接し方を見直す機会になる。

M児の変容の二つ目の要因として、M児と周りの子どもたちとの関係が変わってきた点が挙げられる。昨年までのM児への先入観から「言葉を発しない。みんなの前ではしゃべれない。」と決めつけていた子ども達が、日々のM児の係活動、学習以外の場所で見せる彼のよさを発見し、認めることができるようになっていった。

安心感のなかで自分らしさが出せるためには受容や共感の関係が重要である。また、得意なことを引き金にして、周りから尊敬されるような立場へと、関係性が組み替えられたのだとも考えられる。

## (2) 「公共性」に関するエピソードを持ち寄ることから

「わかりました」で、本当にわかっているか？

円周を調べる授業中、A児が半径6cmの円の円周37.68cmとした。この時点では円周率は学習していない。測定して求めている場面である。当然B児から疑問が出された。B「どうやって求めたのですか。」 A「定規で測りました。細かいから目盛りのないところは目分量です。」 B「わかりました。」これは分かっているとはいえない場面である。Bは分かっていると答えながら、実は本当には考えていない。話し合いが成立し、相手の意見を受け入れているように見えるが、このような意見の交換は「非公共性」の現れと考える。相手の意見を真剣に受け止めるならば、その意味を考え、どのような状況なのかを想像し、判断すべきである。1mmの1/10が目分量で読み取れることに疑問を呈さなくてはならない。また、Bの最初の質問の言外には「そんな細かな数字まで…」という思いが込められていたと考えられるが、Aはそこを付度していない。さらにAの答えから、Bは自分の最初の質問の言外の意味を受け取られていないことが分かるはずだが、それにもこだわっていない。様々な問題を含む場面であった。(算数)

「自分がそれを選ぶわけ」をしっかりと交流する

市民の学習で3社の新聞の第一面の比較をした。すると全部に天気予報があることを発見。しかし、書きぶりに違いがあった。自分が一番よいと思うのはどれか意見交換した。シンプルに関東地方のみの1日の天気予報を載せた朝日新聞、5日分の全国の天気予報を詳しく載せた読売新聞、子どもたちが選んだ新聞は様々だった。当然、詳しい情報をもつ読売新聞がよいと誰もがそう思いそうところ、「ほしい情報だけあればよい」とあえて朝日新聞を選ぶ子どもたちも何人かいた。その日の学習感想には、「読み手がほしい情報は、みんな同じではないことがわかった」とあった。それまで自分がもっていない視点に気づいた子どもの姿が表れている。(市民)

それってどういうこと？と尋ねることばを大切に

ことばの授業で、新聞やテレビのニュースから記事から意見交換をする学習単元に取り組んだときのこと。N児が「花びらで道に絵を描くアート」について「街を美しくするからとてもよいで賞」をつけたが、K児は「花をばらばらにして？それはよくないでしょう」。また、M児が「ゴム製雑貨でアマゾンの緑を守る」ニュースについて「環境にやさしいで賞」としたが、S児「ゴム製雑貨にして木を切らない言ってもゴム作るのに石油使うだろう？」。子ども達は、同じニュースでも見方によって価値が違って見えることに気づいた。ひとりでは思い込んでしまっていて気づかないことがあるが、他者の「疑問」を投げかけられて、自分にはなかった視点を知ることができた。それってどういうこと？と素直に尋ね、そこからの応答が重なる関係を大切にしていこう。(ことば)

「観察した事実に基づく」ことの重さを知る

自然の「流れる水の働き」の学習で低学年砂場での流水実験が終わり、そのまとめをクラス全体で行っていた。実験をして気付いたこと(事実の確認)を発表する段階で、A児が、「曲がっているところは外側が削られて、内側に積もった。」と発言した。A児は発言力が強く、知識も豊富なので、多くの児童はその意見に賛同した。それに対しB児が、「曲がっているところの外側が削られているとは限らない。削られているところもあったが、それはもっと下のほうに積もっていた。」と発言した。普段挙手することが少ないB児の発言に皆は驚きの様子。A・B双方の発言はクラス全体の論議を生み、当初発言力の強いA児の意見に流れるかに見えた。しかし、C児が「もう一度実験して事実を確かめればよい」と発言。再実験の結果、紛れもなく、B児の観察が正しいとわかった。これは、自然の学習において、概念を述べる者よりも、事実を正しく観察した者のほうが優位に立てること、関係性が変わる可能性を如実に示した一例である。(自然)

#### 4 公開研究会での授業提案や協議会討議を経て

##### (1) 部会として授業改善のために目指したことや、そのための手立て

- ① 少ない空き時間だが、学年担任同士できるだけ、お互いの日常の授業を見合った。
- ② 毎週月曜日の放課後の学年会で、子どもの学習・生活の情報交換をする。そのとき漠然と問題にするのではなく、「公共性」の視点で子ども達の関係性を語り合うように心がけた。
- ③ ひとりの子どもの焦点を当てて、その子の発達課題の捉え方や変容のための手だてについて、担任それぞれが考えを記述し、読み合った。
- ④ 授業場面での「公共性」の表れや、逆に「公共性」とは言えない実状について、エピソード形式で実践記録を書き、教師自身の価値観を確かめ合ったり磨き合ったりした。

##### (2) 具体的な成果や問題点

- ① 日常の授業を見合うことによって、他の教員が子ども達と創り上げている教室の雰囲気や「公共性」を育むことばかけについて、考え、学び合うことができた。
- ② まだ、子ども達の「公共性」リテラシーを一般化して整理することはできていないが、大切にしたいことは共有できるようになった。例えば、事実に基づいて主張する力・正解に終わらせないこと・人による差別をしないで意見内容そのものを聞く態度など。
- ③ 「公共性」を支える意味でも、特に学力の低い子どもたちへのケアや指導の工夫が必要である。

##### (3) 協議会での話題・意見・質問など

- ① 関わり合いを深める具体的な授業の手だてを教えてほしい（特にことば） → 子どもひとりひとりに表現する自信とその責任をくりかえし体験させる。異なる考えを排除しないことに関わる教師のスタンスは、例えば詩の暗唱など個々の違いを浮き上がらせる学習を仕組む。質問する習慣をつける。
- ② 正解に終わらせない、ということは、とても大事だと思うが、むずかしい（特に算数） → 一見まちがいに見えるすじみちを子どものことばで説明させる。簡単に「わかった」と流れないようにする。正解がでたときに、それで終わりとしめない。正解の中に改善できるところはないか、新しい課題は作れないかなどとふり返る。
- ③ すぐに答えを出すのではなく長いスパンをかけて授業研究に取り組むことの重要性。

##### (4) 協議会を経て、今後の課題であると認識したこと

- ① 違いを尊重する、というときの、批判と共感のバランスを、子どもにどう教えるか。
- ② 協議会の運営を、参加型に変えてみた。まず各分野に共通するリテラシーは何か、問いかけと答えをこちら担任団のほうから提案し、それをきっかけに小グループでの話し合いを15分間。最初はとまどいもあったようだが、いろいろな地域から来た人と話せてよかったという声がアンケートに書かれていた。200人いても相互交流をあきらめず、参会者の「かまえ」を（ノウハウを教えてください：受け身的）から（話し合って考えよう・学ぼう：主体的）に高める必要性を感じた。
- ③ 排除しないというフレーズに込められた意味は何か、という質問に対して、思いやりと答えだが道徳的に捉えられてしまう危惧が残った。さらに、将来にわたって違う立場を理解し尊重しあえる思考と判断ができる責任ある市民を育てるのだ、というように、こちら実践研究に自信をもち明確に答えるべきだった。正直なところ、本校に「公共性」育成学習環境ができてきたか、学習内容は十分検討できているかどうか、まだ言い切れなかった。